

400

日蓮大聖人御書全集

にいけごしょ

新池御書

新版
2062
S
2069

にい けご しょ

新池御書

こうあん

ねん

がつ

きい

にい けどの
にい けどの

弘安 3年

('80) 2月

59歳

新池殿

うれしきかな、末法流布に生まれあえる我ら。かなしき
かな、今度この経を信ぜざる人々。そもそも、人界に生を
受くるもの、誰か無常を免れん。さあらんにとつては、何
ぞ後世のつとめをいたさざらんや。

つらつら世間の体を観ずれば、人、皆、口にはこの経を
信じ、手には経巻をにぎるといえども、経の心にそむく
あいだ、悪道を免れ難し。譬えば、人に皆五臓あり。一臓

そん

ぞう

やまいい

き

よ

ぞう

やぶ

つい

いのち

うしな

でんぎょうだいし

ほけきょう

ほ

も損ずれば、その臓より病出で来て余の臓を破り、終に命を失うがごとし。ここをもつて伝教大師は、「法華經を讀

むといえども、還つて法華の心を死す」等云々。文の心は、

法華經を持ち読み奉り讚むれども、法華の心に背きぬれ

ば、還つて釈尊・十方の諸仏を殺すに成りぬと申す意な

り。終に世間の悪業・衆罪は須弥のごとくなれども、この經

にあり奉りぬれば、諸罪は霜露のごとくに法華經の日輪

に値い奉つて消ゆべし。しかれども、この經の十四謗法

の中に一も二もおかしぬれば、その罪消えがたし。所以は

なか

いち

に

犯

つみき

ゆえん

いちだいさんぜんかい

うじょう ころ

いかん。一大三千界のあらゆる有情を殺したりとも、いか
でか一仏を殺す罪に及ばんや。法華の心に背きぬれば、
十方の仏の命を失う罪なり。このおきてに背くを謗法の
もの
者とは申すなり。

じごく 恐 ほのお

いえ がきかな

地獄おそるべし、炎をもつて家とす。餓鬼悲しむべし、
飢渴にうえて子を食らう。修羅は鬪諍なり。畜生は殘害と
て互いに殺しあう。紅蓮地獄と申すは、くれないのはちすと
よむ。その故は、余りに寒につめられてこごむあいだ、

けかち 飢 しゅら とうじょう ちくしょう ざんがい
たが 合 く こう あま かん 詰 紅

読 いく い くわい はちす に
せなかわれて肉の出でたるが、紅の蓮に似たるなり。い
背 中 割 い くわい はちす に

わんや大紅蓮をや。かかる悪所にゆけば、王位・將軍も物
ならず。獄卒の呵責にあえる姿は、猿をまわすに異ならず。
この時は、いかでか名聞名利・我慢偏執有るべきや。
思しめすべし。法華經をしれる僧を不思議の志にて
一度も供養しなば、惡道に行くべからず。いかにいわんや、
十度二十度、乃至五年十年・一期生の間供養せる功徳を
ば、仏の智慧にても知りがたし。この経の行者を一度
供養する功徳は、釈迦仏を直ちに八十億劫が間、無量の
宝を尽くして供養せる功徳に百千万億勝れたりと仏は

と
説かせ給いて候。この経にあい奉りぬれば、悦び身に
あり、左右の眼に涙浮かびて、釈尊の御恩報じ尽くしが
たし。かようによこの山まで度々の御供養は、法華経ならび
に釈迦尊の御恩を報じ給うに成るべく候。いよいよはげ
ませ給うべし。解ることなかれ。

ま
皆人のこの経を信じ始むる時は信心有るようによ見え
候が、中ほどは信心もよわく、僧をも恭敬せず、供養を
もなさず、自慢して悪見をなす。これ恐るべし、恐るべし。

はじ
お

して、後悔やあらんずらん。譬えば、鎌倉より京へは十二日
の道なり。それを十一日余り歩みをはこびて、今一日に成
つて歩みをさしおきては、何として都の月をば詠め候べ
き。何としてもこの経の心をしれる僧に近づき、いよい
よ法の道理を聴聞して、信心の歩みを運ぶべし。
ああ、過ぎにし方のほどなきをもつて知んぬ。我らが命、
今幾ほどもなきことを。春の朝に花をながめし時ともない
遊びし人は、花とともに無常の嵐に散りはてて、名のみ残
りてその人はなし。花は散りぬといえども、またこん春も

ひら

き

ひと

よ

きた

発くべし。されども消えにし人は、またいかならん世にか来るべき。秋の暮れに月を詠めし時戯れむつびし人も、月とともに有為の雲に入つて後、面影ばかり身にそいて物いうことなし。月は西山に入るといえども、またこん秋も詠むべし。しかれども、かくれし人は今いづくにか住みぬらん、おぼつかなし。

無常の虎のなく音は耳にちかづくといえども、聞いて驚くことなし。屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん。

雪山の寒苦鳥は、寒苦にせめられて、夜明けなば栖つぐら

な
ひい
あさひ
暖
な
いっしょむな
な
いっしょむな
な
とをう。一切衆生もまたまたかくのごとし。地獄に墮ちて
ほのお
得
いっさいしゅじょう
炎にむせぶ時は、願わくは今度人間に生まれて、諸事を閻
さんぽう
くよう
ねが
こんどにんげん
う
じごく
お
いて三宝を供養し、後世菩提をたすからんと願えども、た
ともしご
き
にんげん
きた
とき
みょうもんみょうり
かぜ
激
ねが
しょじ
さしお
またま人間に来る時は、名聞名利の風はげしく、仏道修行
ともしご
き
むやく
ざいほう
尽
ぶつどうしゅぎょう
物
憂
惜
の灯は消えやすし。無益のことには財宝をつくすにおし
ぶつぼうそう
少
くよう
からず、仏法僧にすこしの供養をなすにはこれをものうく
じごく
つか
競
おも
思うこと、これただごとにあらず。地獄の使いのきおうも

のなり。才善尺魔と申すはこれなり。

すんぜんしゃくま

もう

その上、この国は謗法の土なれば、守護の善神は法味にう
えて社をすて天に上り給えば、社には悪鬼入りかわりて
多くの人を導く。仏陀は化をやめて寂光土へ帰り給えば、
堂塔・寺社はいたずらに魔縁の栖と成りぬ。国の費え、民
の歎きにて、いらかを並べたるばかりなり。これ私の言
にあらず、経文にこれあり、習うべし。

しょぶつ

しょじん

ほうぼう くよう

まつた う

と

たま

諸仏も諸神も、謗法の供養をば全く請け取り給わず。い

にんげん

受

かすがのだいみょうじん

わんや、人間としてこれをうくべきや。春日大明神の

御託宣に云わく「飯に銅の炎をば食すとも、心穢れた
る人の物をうけじ。座に銅の焰には坐すとも、心汚れ
たる人の家にはいたらじ。草の廊、萱の軒にはいたるべし」
と云えり。「たとい、千日のしめを引くとも、不信の所には至らじ。重服深厚の家なりとも、有信の所には至るべし」云々。かくのごとく、善神はこの謗法の國をばなげきて天に上らせ給いて候。心けがれると申すは、法華経を持たざる人のことなり。この経の五の巻に見えたり。謗法の供養をば 銅の焰とこそおおせられたれ。神だにも

じゃちしん ほつし 原 こと ほか おんかたき ちえ
邪智心の法師ばらは、殊の外の御敵なり。智慧においても、
正智あり、邪智あり。智慧ありとも、その邪義には随うべ
からず。貴僧・高僧には依るべからず。賤しき者なりとも、
この経の謂れを知りたらんものをば、生身の如来のこと
くに礼拝・供養すべし。これ経文なり。

されば、伝教大師は「無智・破戒の男女等も、この経を
信ぜん者は、小乗二百五十戒の僧の上の座席に居えよ、
末坐にすべからず。いわんや、大乗この経の僧をや」と
あそばされたり。今、生身の如来のことくにみえたる

極楽寺の良觀房よりも、この経を信じたる男女は座席を高く居えよとこそ候え。彼の一
百五十戒の良觀房も、日蓮に会いぬれば、腹をたて、眼をいからす。これただごとにあらず。智者の身に魔の入りかわればなり。譬えば、本性よき人なれども、酒に酔いぬればあしき心出来し、人のためにあしきがごとし。

ほとけ ほつけいぜん かしよう しゃりほつ もくれんとう

ひと ひと さけ よ

ちしゃ み ま い

善 ひと 惡 ひと

はら 立 まなこ 怒

たか す そうら か にひやくごじつかい りょうかんぼう

にちれん にちれん

にひやくごじつかい たも

こんごう

さんせん

いぎぐそく

二百五十戒を持つことは金剛のごとし、三千の威儀具足す

じゅうごじや つき

ほけきょう

たも

ることは十五夜の月のごとなりしかども、法華経を持た

とき

ざる時は、かくのごとく仰せられたり。いかにいわんや、

おと

こんじ

もの

おおやま

けんちょうじ

えんがくじ

そう

それに劣れる今時の者どもをや。建長寺・円覚寺の僧ども

さほうかいもんやぶ

おおやま

くず

いぎ

の作法、戒文を破ることは大山の頽れたるがごとく、威儀の放埒なることは猿に似たり。これを供養して後世を助から

ほうらつ

さる

に

くよう

ごせ

たす

んと思うは、はかなし、はかなし。

しゅごぜんじん

くにす

うたが

むかし

守護の善神、この国を捨つること疑いあることなし。昔

しゃくそん

みまえ

しょてんぜんじん

ぼさつ

しょうもん

いくどうおん

ちか

釈尊の御前にして、諸天善神・菩薩・声聞、異口同音に誓

立

たま

ほけきょう

おんかたき

くに

いをたてさせ給いて、「もし法華経の御敵の国あらば、あるいは六月に霜・霰と成つて國を飢饉せさせん」と申し、

あるいは「小虫と成つて五穀をはみ失わん」と申し、あ

るいは「旱魃をなさん」、あるいは「大水と成つて田園をなが

さん」と申し、あるいは「大風と成つて人民を吹き殺さん」

と申し、あるいは「悪鬼と成つてなやません」と面々に申させ給いき。今の八幡大菩薩もその座におわせしなり。いか

でか靈山の起請の破るるをおそれ給わざらん。起請を破ら

せ給わば、無間地獄は疑いなきものなり。恐れ給うべし、

たま ろくがつ しも あられ くに ききん もう もう かんばつ しょうちゅう な ごこく 食 うしな もう おおみず な でんえん おおかぜ な にんみん ふ ころ あつき な 懊 さ ま もう いま はちまんだいぼさつ やぶ めんめん もう りょうぜん きしよう やぶ おそ たま おそ たも

おそ たも
恐れ給うべし。

いま まさ ほとけ おんつか しゅつせ きょう ひろ
今までは、正しく仏の御使い出世してこの経を弘めず。

こくしゅ たつと
國主もあながちに御敵にはならせ給わず。ただいづれも

おも おんかたき いま それがし ほとけ おんつか たま
貴しとのみ思うばかりなり。今、某、仏の御使いとし

かみいちにん いた
上一人より下万民に至るまで、

みなほうぼう な お いま
てこの経を弘むるによつて、皆謗法と成り畢わんぬ。今までは、「この国の者ども、法華経

おんかたき

いっし

生 憎

す

の御敵にはなさじ」と、一子のあやにくのごとく捨てかね

りょうぜん

きしよう

恐

やしろ

や はら

ほけきよう

ておわせども、靈山の起請のおそろしさに、社を焼き払つ
て天に上らせ給いぬ。さはあれども、身命をおしまぬ

てん のぼ

たま

しんみよう

惜

ほけきょう　ぎょうじや

法華經の行者あれば、その頭には住むべし。天照太神。

はちまんだいぼさつ　てん　のぼ　よ　しょじん　りょうぜん　やしろ

八幡大菩薩、天に上らせ給わば、その余の諸神いかでか社

とど

に留まるべき。たとい捨てじと思しめすとも、靈山の

約

束

それがしかしゃく

たてまつ

いちにち

やくそくのままに某呵責し奉らば、一日もやわかおわ

たと

ぬすびと

そうろう

とき

すべき。譬えば、盜人の候に、知れぬ時はかしこやここ

す

よ　あんないし

もの

ぬすびと

に住み候えども、能く案内知りたる者の「これこそ盜人よ」

罵

響

思

ほか

すみか

さ

とののしりどめけば、おもわぬ外に栖を去るがごとく、

それがし

障

やしろ

す

たも

某にささえられて社をば捨て給う。しかるに、この国、

くに

おも

ほか

あつきじん

す

思いの外に悪鬼神の住みかとなれり。哀れなり、哀れなり。

あわ

いちだいしようぎょう ひろ ひとおお
また一代聖教を弘むる人多くおわせども、これ程の
大事の法門をば、伝教・天台もいまだ仰せられず。それも
道理なり。末法の始めの五百年に上行菩薩の出世あつて
弘め給うべき法門なるが故なり。相構えて、いかにしても
この度この経を能く信じて、命終の時、千仏の迎いに預
かり、靈山淨土に走りまいり、自受法樂すべし。信心弱く
して成仏ののびん時、某をうらみさせ給うな。譬えば、
病者に良薬を与うるに、毒を好んでくいぬれば、その病愈
えがたき時、我がとがとは思わず、還つて医師を恨むるが

「ごとくなるべし。

この經の信心と申すは、少しも私なく、經文のごとくに、人の言を用いず、法華一部に背くことなけれど、仏に成り候ぞ。仏に成り候ことは別の様は候わず。南無妙法蓮華經と他事なく唱え申して候えば、天然と三十一相八十種好を備うるなり。「我がごとく等しくして異なることなし」と申して、釈尊程の仏にやすやすと成り候なり。

譬えば、鳥の卵は始めは水なり。その水の中より、誰か

なすともなけれども、**觜** よ目よと厳り出で来て、虚空にか
けるがごとし。我らも無明の卵にしてあさましき身なれど
も、南無妙法蓮華経の唱えの母にあたためられまいらせて、
三十一相の觜出でて八十種好の鎧毛生いそろいて、実相
真如の虚空にかけるべし。ここをもつて経に云わく「一切
衆生は無明の卵に処して、智慧の口ばしなし。仏母の鳥は
分段・同居の古栖に返つて、無明の卵をたたき破つて、一切
衆生の鳥をすだてて、法性真如の大虚にとばしむ」と説け
り **〈取意〉**。

うげむしん

有解無信とて、法門をば解つて信心なき者は、さらには

じょうぶつ

成仏すべからず。有信無解とて、解はなくとも信心あるも

じょうぶつ

のは、成仏すべし。皆この経の意なり。私の言には

にまき

あらず。されば、二の巻には「信をもつて入ることを得た

おのちぶん

り。己が智分にあらず」とて、智慧第一の舍利弗も、ただ

きょううたもしんじんじょうじょう

ちえだいいちしゃりほつ

この経を受け持ち信心強盛にして仏になれり、己が智慧

ほとけたま

ほとけ

おのちえ

にて仏にならずと説き給えり。舍利弗だにも智慧にては

ほとけ

仏にならず。いわんや、我ら衆生、少分の法門を心得た

しんじん

ほとけ

覚

東

りとも、信心なくば仏にならんことおぼつかなし。

末代の衆生は法門を少分こころえ、僧をあなざり、法を
いるかせにして悪道におつべしと説き給えり。法をこころ
えたるしるしには、僧を敬い法をあがめ仏を供養すべし。
今は仏ましさず。解悟の智識を仏と敬うべし。いかで
か徳分なからんや。後世を願わん者は、名利名聞を捨てて、
いかに賤しき者なりとも法華経を説かん僧を生身の如来
のごとくに敬うべし。これ正しく経文なり。

今時の禪宗は、大段、仁・義・礼・智・信の五常に背け
り。有智の高徳をおそれ、老いたるを敬い、幼きを愛す

ないげでん ほう
るは内外典の法なり。しかるを、彼の僧家の者を見れば、
きのうきょう でんぷやじん こくびやく もの み
昨日今日まで田夫野人にして黑白を知らざる者も、かちん
じきとつ こうとく ひと 打 まん てんだい しんごん うち
の直綴をだにも着つれば、うち慢じて、天台・真言の有智・
けい うい かみ お おも
高徳の人をあなざり、札をもせず、その上に居らんと思う
ぼうじやくぶじん い かみ お
なり。これ傍若無人にして畜生に劣れり。ここをもつて
でんぎょうだいし おんしゃく ちくしょう おと
伝教大師の御釈に云わく「川瀬祭魚のころざし、林鳥
ふそ しょく つう せんだつきいぎよ 志
父祖の食を通ず。鳩鵠三枝の礼あり、行雁連を乱らず、
こうよううづくま ちち の いや ちくしょう みだ
羔羊踞つて乳を飲む。賤しき畜生すら礼を知ること、か
くのごとし。何ぞ人倫においてその礼なからんや」とあそ
なん じんりん れい

ばされたり 〈取意〉。彼らが法に迷うこと、道理なり。人倫にしてだにも知らず。これ天魔破旬のふるまいにあらずや。

これらの法門を能く能く明らかめて、一部八卷二十八品を

頭にいただき、懈らず行い給え。また某を恋しくおわせん時は、日々に日を拝ませ給え。某は日に一度、天の日に影をうつす者にて候。この僧によませまいらせて、

聴聞あるべし。この僧を解悟の智識と憑み給いて、つねに法門御たずね候べし。聞かずんば、いかでか迷闇の雲を払わん。足なくして、いかでか千里の道を行かんや。返す返す、

しょ

読

ごちょうもん

ことばことめん

この書をつねによませて御聴聞あるべし。事々面の次いで
を期し候。あいだ、委細には申し述べず候。あなかしこ、
あなかしこ。

こうあんきんねんにがつ
弘安三年二月 日

にちれん
日蓮 かおう
花押

新池殿

にいけどの
ご そうろう